

台湾「2019 新北考古生活節」参加記

台湾で開催された考古学をテーマとするフェスティバルに参加してきた。主催する十三行博物館は、台北に隣接する新北市にある。十三行遺跡の発掘をきっかけとして設立された台湾北部ではじめての考古学博物館である。本館とは学術文化交流協定を結んでいることもあり、このイベントにもお招きいただいている。例年4月中に催される行事だが、今年は十三行博物館に隣接する「新北考古公園」のお披露目に合わせ、5月25・26日の土日に開催された。イベントのねらいは、台湾の市民に考古学に関連した体験活動をしてもらい、考古学をわかりやすいかたちで知ってもらう機会を提供するところにある。



初日のシンポジウムの様子



九份視察

台湾の5月は、すでに日差しが強い。前日、夜市で買った帽子をかぶり、考古博のブースに入る。台湾内外の大学や研究機関、地元の教育関連施設だけでなく、農産品や食べ物を扱うブースも数多く、全ては回りきれない。野外劇場ではコンサートや地元の子どもの演芸も披露されていた。西都原考古博からは松林主幹と松本の2名が参加し、台湾の人たちに勾玉づくりを体験してもらった。日本からは兵庫県立考古博物館、佐賀県立博物館、沖縄県立博物館・美術館の参加があり、他には韓国の全谷先史博物館も参加されていた。

勾玉はいわゆる「勾玉」の他に、^{しずく}滴型、クリスタル型も用意した。滑石をやすりや砥石、サンドペーパーを使って磨きあげ、仕上げてもらおう。台湾の皆さんは大人も子供も皆熱心である。事前の計画では、一連の工程で20分を見込んでいたが、正直なところ子供にとっては時間が足りない。それでも一生懸命に削って磨いていた。面白いのは、親があまり手を貸さず、なるべく子供に自力でやらせようとするところだ。来年以降、同じようなワークショップをする場合は、一人あたりの作業時間をもう少し多く見込んだ方が良かった。

こうしたワークショップは、日本ですると同じように、参加者とコミュニケーションを取る必要があるが、私たちはもちろん中国語も台湾語も話せない。だから、十三行博物館が配備してくれた通訳のジェシカ先生や、アイビーさん、王君をはじめとする学生ボランティアの皆さん（大学で日本語を専攻）、博物館ボランティアの朱さんの協力で全面的に頼った。それでも二日のあいだに教えてもらって覚えた中国語もある。

「你喜歡哪個顏色？（どの色が良いですか？）」※勾玉に通す紐の色を選んでもらうときに

「借我看看（ちょっと見せてください）」※勾玉の仕上がりを確認するときに

「磨磨磨（磨いてください）」※勾玉を布で磨いてもらうときに

台湾での経験は、学術的な部分だけではなく、こうしたアウトリーチの側面で学ぶところが大きかった。今後も有意義な交流ができればいいと思う。 （松本 茂）



会場の様子



西都原考古博物館のブース